

# 目次

はじめに

002

第一部 封印された尊王思想書『靖献遺言』の謎

第一章 山崎闇斎と浅見綱斎の師弟決別

014

## 第一章

・ 運命の人との出会い

・ 神道の核心は皇統の護持

・ 中国が孔子を大将、孟子を副将として日本に攻めてきたらどうするか

・ 軟弱では学問を習得することはできない

・ 仰ぎて君となす者はひとり天皇あるのみ

025 022 020 016 014

## 第二章

靖献遺言とは、

「君主に仕えて忠義を尽くした義士が残した最期の言葉」

030

- ・ 浅見綱斎は京の朝廷の威権弱体化に我慢ならなかった
- ・ 日本ではなく、中国の忠臣義士について書くことにした理由

032 030

## 第二部 『靖献遺言』を読む

## 第一章

国が亡びるのを黙って見ているくらいなら  
いつそ死んだほうがましである（屈原）

037

### 解説

- ・ 屈原が仕えた楚国の栄光と挫折
- ・ 司馬遷が絶賛した忠誠心
- ・ 時を越えて残る悠久の大義
- ・ もっと上手く世渡りしなさいという処世観との衝突
- ・ 西郷、高杉の心を励ました屈原の大志

052 050 048 045 043

## 第二章

今より以後、諸君のなかで、国家に忠誠を誓う者は、遠慮なく私の過失を責めてくれ。そうすれば、天下の大事も定まり、賊は滅びるであろう（諸葛亮孔明）

### 解説

- ・ 満々たる野心を秘めながら雌伏の時を待つ「臥龍」、孔明
- ・ 四十七歳の劉備が二十七歳の孔明に三顧の礼を尽くす至誠
- ・ 天皇へ楠木正成がした劇的な答え
- ・ 流浪の主君に従い戦場を駆け巡った孔明と正成
- ・ 死を覚悟した湊川の戦いで果てる
- ・ 七生まで、ただ同じ人間に生まれて、朝敵を滅ぼそう
- ・ 朝廷に尽くした男たちの一族に受け継がれる魂

104 101 098 093 091 087 084 057

## 第三章

わずかな給料を得るために、官職についてへいこらしていられるか。仕官の誘いもあったが、二君に仕えることはできない。私は仮住まいたるこの世を辞して、永久に本宅たるあの世へと帰る（陶淵明）

### 解説

- ・ 落ちぶれた陶淵明の家系
- ・ 官仕えは不得意でも「足るを知る」精神で乗り切る
- ・ 陶淵明はなぜ『靖献遺言』に載っているのか

122 119 117 108

## 第四章

君命である。臣下たる者、

どのような事があっても君命を避けることはできない（顔真卿）

126

### 解説

- ・特攻隊を嘲笑した戦後日本人
  - ・歴史が記憶に残るかぎり、日本と日本人は滅びない
  - ・特攻隊員は「犬死に」したのか
  - ・士は己を知らぬもののためにも死ぬ
  - ・道義に背くことは自らを否定するだけでなく家を否定すること
- 154 150 148 145 142

## 第五章

王朝の危機に際し一騎として馳せ参じる者がいない。私はこれを深く恨む。だから私は、自分の非力を省みず、身命を賭して祖国を守ろうとするのだ（文天祥）

158

### 解説

- ・吉田松陰と靖献遺言
  - ・松陰のさらなる飛躍となる旅立ち
  - ・黒船に乗り込んだやむにやまれぬ心
  - ・外敵を滅ぼすのを慎むことなく自分の使命としよう
  - ・松陰は靖献遺言を読んでどう感じたか
- 195 190 187 185 180

・ 主家が亡びる様を眼前で目撃した衝撃  
——  
・ 人はどのように死ぬべきかを問うた高杉晋作への答え  
——  
203 197

## 第六章

孝孺は死の間際になっても、燕王（永楽帝）の不義を罵り続けた。燕王は周囲の者に命じて、孝孺の口を刀で抉らせた。口は耳まで裂かれ、血が流れた。それでも、孝孺は燕王を罵倒した。七日間、その声が聞こえた（謝枋得／劉因／方孝孺）——  
209

・ 大作家の衝撃的な切腹  
——

・ 三島由起夫の「このまま行ったら日本はなくなってしまふ」という予言  
——

・ 七生報国という転生する精神  
——

終わりに 『靖献遺言』の後に書す  
——  
240

訳・解説者 あとがき  
——  
248